

追悼 奥田聡さん

渡 辺 邦 博

奥田さんとのことは、別途学会誌に掲載したが、それと重ならない諸事情を綴って、思い出の縁としたい。

おそらく彼との交友は、近頃は師弟関係などと言った「旧き習慣」も廃れたように思われることが少なくないが、私たちの共通の「恩師」である眞実一男先生のゼミナールに彼が顔を出した頃に始まる。聞くところでは、奥田さんは、1980年に大阪市立大学経済学部に入學したそうで、そうだとすれば、専門ゼミ参加は、1982年以降ということになる。

私が専門ゼミに参加した折の眞実先生の研究室は、大阪市立大学の校舎の外れにポツンと建っていた旧経済研究所との共通の建物から、新経済学部棟に移転した頃ではなかったかと思う。ちょうど先生の第二番目の著書であった『リカード経済学入門』（新評論、1975年5月1日刊）が出たばかりであった。右も左も分からないまま研究者のスタートを切った当時の私には、ゼミナールのテキストにスミスの『国富論』を何年かかけて終えた後、次のテキストに『剰余価値学説史』が採用されたことと、先生のリカードに関する新著が出されたことも重なり、研究室が近かった佐藤金三郎先生のゼミからもその年はかなりの学生の合流を見て、通常2年に1名程度でしかなかったゼミは何時になく賑い、大きな部屋に移動したのが思い出される。おそらく先生が大阪市内の針中野公舎から、斑鳩町の新居へと引っ越された時期でもあったろうが、ゼミのサブテキストとして『リカード経済学入門』を一括注文したのを記憶している。ゼミ開始にあたり、先生の新居には、主専攻も副専攻も交えた学生たちが集まったが、「借りてきた猫のようなのは止せ」と先生が皆をリラックスさせ、ねぎらっておられた。その時におそらくは、法隆寺へのエクスカーションもあったのではなかったかと思う。今は市大の産業技術論を講義されている坂上茂樹さんもゼミに参加しており、深酒が応えて先生のお宅に泊めてもらった者も出たのではなかっただろうか。

市大レスリング部の学生だった奥田さんが、ゼミ参加の意思を表明しに研究室に来た頃、私は大阪の郊外に転居していた。大分に職を得た丸山武志さんに代わって当時毎日のように先生の研究室で留守番するのは、現京都学園大教授の渡辺恵一さんの役割だった。1981年から眞実先生が経済学史学会のお仕事に時間を割かなければなくなり、ちょうど大阪府大から移籍され学会事務局を手伝っておられた服部容教先生のゼミ生となった奥田さんと、私はしばしば話をするようになった。眞実先生は外的な強制を退けられたので、ゼミの所属が形式上どうであったかはあまり重要なことではない。先に述べた坂上さんが兄

貴分みたいな役割を果たしてよく彼の面倒をみていた。奥田さんの研究ベースは、服部先生に重なる面もあったが、苦しいながらも共に取り組んだサミュエル・ホランドーの『リカードの経済学』（1979年）の準備に、先生がイタズラっぽい眼で、「時間が足りないなら、2週間に一度にしてやろうか」と言われたのをよく覚えている。

少し関連するが、当時梅田の大阪駅前第4ビルにあった大阪市大の国際交流センターの一室を借りて昭和59（1984）年に発足した「古典読書会」にも彼が参加するようになり、翌年に、彼が大阪府立大学大学院に進学してからも、その後会場は大阪経済大学に移動したけれども、熱心な会員であり続けた。

読書会は、私も含めて、彼以外にもまだ職が決まっていなかった人たちが多く、研究会の後、最寄の駅周辺で談論風発、お互いの立場を超えて遅くまで時間をすごした。おそらく彼が平成3（1991）年に岡山商大に職を得るまでのものと思われるが、私の手元には未整理のままだが、その頃のかんりの写真がある。坂上さんと一緒に、大阪近郊や奈良に転居してからの、私の家に遊びに来てくれたことも一度ならずある。

「古典読書会」は、琵琶湖、山陰、あるいは金沢などでいく度か合宿もして、研究のあり方などについて熱っぽい議論もした。何かの折、私に岡山近辺で用務があったからだと思うが、備中高梁に足を延ばす必要があり、その前後に、すでに岡山に赴任していた彼の運転で吉備津神社や鬼ノ城にも案内してもらった。高梁城にも登坂して、しばし城下を眺めたことも懐かしい。近年どの大学でもやたらと忙しくなり、こうした時間が持てたことは幸運であったと言えるかも知れない。

その後「古典読書会」のメンバーは、各自の勤務の関係でそれまでのように定例では集まれなくなり、その活動は、ステュアートの『経済の原理』の第3編の解説・翻訳に向かい、各自の勤務地を中心としてステュアートの主著『経済の原理』後半部分の翻訳完成に集中するようになった。そんな事情で彼と再会したのは、1995年の9月にグルノーブルで開催された史上最初のジェイムズ・ステュアート・コロックにおいてであった。その年私は、大学の同僚と一足早く日本を離れ、フランスを時計回りに移動してから、ダブリンで開催されたHETに参加するためアイルランドに渡り、それからジュネーヴ経由でグルノーブルに向かった。グルノーブルでは、小林昇先生や水田洋先生にお会いし、会場に設定された郊外のヴィズィル城で、多分結婚されたばかりの奥田夫妻に会うことができた。韓国から参加したヤン氏と仲良くなった彼は、城の一室で行われた私の報告を激励してくれたが、ほとんどの報告者のネイティ・ヴランゲジがフランス語であったから、司会者のアンネ・コットさんが英語を使われるのには少し安心したけれども、私は終始緊張を緩めることができなかった。大広間で行われたカンファレンス・ディナーでも、奥田夫妻とゆっくり話す暇がなかったように記憶している。ただ、私よりも若い世代のヤン氏は、韓国では珍しくイギリスのダラムに留学し、戦後日本の経済学史学会が復刻したステュアートの『経済の原理』を使っの研究成果を書物にした直後で、私の出発日と彼のそれがリヨン・サトラスから同じだったこともあり、スタンダーの旧居を訪ねたり、街を見下ろすりフトなどに乗り、学史研究のあり方などを数日間語り合えた。

日本を離れる前に眞実先生のお宅を訪問された奥田夫妻が、ゆっくりフランスを周遊すると語られており、確か、エクス・アン・プロバンスに足を延ばしたいと言われていたので、お二人は学会の前後にそこに赴かれたのではないかと思います。

その後、ステュアート『経済の原理』前半部分の翻訳には、後半部分ほど参加する者がなくなったが、参加者のエネルギーや時間はそれに集中することになって、読書会メンバーが一堂に会することが少なくなった。確か彼のアメリカ留学中だったと記憶するが、私の担当する部分の訳注について、アメリカから資料を送ってくれたことがあった。18世紀のイギリスの新聞記事の確認だったが、アメリカの図書館の威力を教えてもらった。

私の知るかぎり、HETは、年次のカンファレンスを数度マンチェスタで開催しているが、テリー・ピーチが主催しての学会の折、いつも50名程度の参加者の中で、10名ほど日本人が参加することがあった。その折、奥田さんも積極的に各国の研究者と交流して、彼の意欲が並々でないのを知らされた。当時ピーチも若く、奥田さんが、ピーチはビートルズのポールに似ていると告げて、ピーチを喜ばせた。

世紀転換の頃から、私の身辺周辺も多忙となったが、恩師の眞実一男先生の教員生活の区切りの会合が、何度か持たれた。それは、大阪の太閤園だったり、奈良町の一角の正悟屋であって、公園内の散策では彼も元気な顔を見せてくれた。

数年前松山で開催された経済学史学会では、最近自宅近くのプールでの水泳を開始したとの話をしてくれたので、一度にどれくらい泳ぐのかなどと聞き、健康談義に花を咲かせた。

最後に、何事にも順番があると言う。私にとって歳下の彼が、年長の私よりも先に旅立つのは、なんとも残念な思いがしております。